インタビュー

＊この作品はフィクションです。実在する人物・団体とは一切関係ありません。

その日。ぼくは、一本の剃り残しもないように丁寧に髭を剃り、買ったばかりのワイシャツに袖を通し、クリーニングから戻ってきたばかりのスーツを着、鏡の前で何度もネクタイを取り替え、匂いのきつくない整髪剤で髪を整え、よそいきの靴をはき、張り切ってアパートを出た。

なにせ今日は、新しい編集部に配属されてから初仕事。しかも、そのパートナーは、十数年前、まだ中学生だったぼくが初めて「右手の恋人」に選んだ女性だったのだ。

午前十時に有楽町のホテルのロビーで待ち合わせだったから、会社には寄らずに直行した。回転ドアを潜る瞬間、こほんと咳払いし、ネクタイの歪みを直した。

「よお」

手をあげた小柄な女性は、五歳年上の専属カメラマンの米田舞子さん。ショートカットの茶髪。紺色のジャケットにオレンジ色のシャツ、黒いジーンズにスニーカーといういでたちだった。

「おはようございま〜す」

ぼくは弾んだ声で頭を下げた。それから、彼女の周辺を見回した。

「ヒロコさん、まだだよ」
舞子さんは、何か見透かすような眼で言った。
「あ、そですか」
ぼくは思わず赤面し、眼をそらした。
「ま、気持ちはわかんなくはないけどさ、一応私らも業界人なんだからね、いきなりサインねだるような真似はやんないでよ」
舞子さんがさらに追い打ちをかける。ぼくは、「まさか、そんな」と弱々しく笑顔をつくった。
「あ、ど〜も、おはようございま〜す」
ぼくの背後から声がした。振り向くと、いた！
一七〇センチ近い長身。アメリカ人のモデルを父に持つ彫りの深い美貌。色の薄い黒髪。ベージュのスーツに膝上のスカート。赤いブローチでアクセントをつけ、素足に淡いピンクのパンプス。急いで走ってきたのだろうか、白いブラウスの胸が大きく弾んでいた。瞬時にぼくは、その人がかつて十七歳のとき、銀行のポスターで披露していた水着姿の、灰色のブラから覗いていた深い谷間を思い出していた。
「あ、ヒロコさん、おはようございます。えと、彼が早川くん」
「あ、よろしくお願いします」
ヒロコさんが丁寧に頭を下げた。ぼくは弾かれたように頭を下げた。

「さっそく行きましょうか」
舞子さんが言う。ヒロコさんが腕時計を見やりながら「そうですね」と頷く。
「早川くん」
「はい？」
惚けたように突っ立っているぼくに、舞子さんはやや苛立ちを見せて言った。
「早くフロントにいって、来たって伝えて」
「は、はい」
ぼくは慌ててフロントへと走った。

ぼくが勤めているのは、雑誌編集プロダクションだ。主に官公庁や業界の広報誌をつくっている。
八年間勤めていた小さな出版社が経営不振に陥り、明日をも知れぬ運命となった。ぼくはツテを頼って現在のプロダクションに中途入社し、医療機器系の月刊業界雑誌に配属された。
その雑誌には、ヒロコさんがホストを務めるコーナーがあった。毎月、さまざまなゲストを迎え、彼女が聞き手となってインタビューするのである。それまで担当していた女性編集者が結婚退職することになり、急遽ぼくにお鉢が回ってきた。
ぼくは天にも昇る心地だった。その夜、ぼくは押入れのなかからため込んでおいたグラビアの

切り抜きやらポスターやらのスクラップから、ヒロコさんの写真を捜し出し、一人Ｈに耽ったのはいうまでもない。

当時、８８・６０・８７とふくよかに発達したヒロコさんの水着姿は、性に目覚めたばかりの田舎の中学生には衝撃的だった。地元の女子高校生には、そんなプロポーションと美貌の持ち主なんぞいなかった。

――小なりといえども、やはり業界に就職してよかった。こういうチャンスがあるんだからなあ……。

十数年ぶりに見るヒロコさんは――といっても実際に会ったのは初めてだが――やっぱり綺麗だった。スーツの上からとはいえ、そのすらりとした四肢と華やかな美貌は衰えを見せていなかった。

一方、舞子さんのほうは、今回のゲストに前日からうきうきしていた。

「だって、チャイナだよ。知らないの？　早川くんちにはＣＳないの？」

「いや、金欠でまだ加入してないんすよ」

「チャイナってのはね、元ＷＷＦの有名な女子プロレスラーよ。女子プロといっても、女同志で戦うんじゃいなの。男のレスラーにまじって、やってたのよ」

「へえ」

ぼくはあまり格闘技には興味はない。

「外人の大男レスラーをやっつけちゃうんだから」

「そうすか」

「それでいて、結構グラマーでセクシーなんだよ。私、ああいう女性に憧れてるんだよね」

「ふうん」

いくらグラマーでセクシーと言ったって、レスラーはレスラーだろう。そんなことよりヒロコさん、ヒロコさん。

そう。そしてぼくはいま、その憧れのひととエレベーターに立ち、彼女の息づかいを感じて胸をときめかしていたのだ。

ドアが開いた。

「Welcome. Please come in」（注１）

「お邪魔しま～す」

第一印象は、意外と小さいな、ということだった。身長は一七三センチくらいでぼくとあまり変わらない。黒いロングヘア。黒いＴシャツに、細いジーンズ。無造作に透明のサンダルをつっかけていた。ただ、筋肉の発達した二の腕はさすがにプロレスラーのそれだった。

それよりも驚いたのは、Ｔシャツを押し上げている胸の大きさだった。資料には「３６・２４・３５」とある。１インチは２・５４センチだから、「９１・６０・８９」といったところか。

顔だちは精悍で野性的だが、なかなかセクシーだ。
まずヒロコさんがチャイナと握手した。彼女が英語でぼくらを紹介する。
「And he's Hayakawa-san, our editor」（注２）
チャイナが「Oh, Hayakawa-san, nice to meet you」（注３）とがっしりした右手を差し出した。腰をかがめてお辞儀しながら手を差し出すと、さすがに握力がある。つづいて舞子さんが握手。いつも冷静な舞子さんも嬉しそうだ。

チャイナはにこやかにぼくたちをソファに招き入れた。こざっぱりとしたセミスイートの応接室で、さっそくインタビューが始まった。
ヒロコさんとチャイナが向かい合って、英語で会話を始めた。ぼくは英語は得意ではないから、黙って聞いているしかない。テープに録音し、後で英語のできるテープリライターに翻訳してもらうのだ。
ぼくは、ヒロコさんからちょっと離れた場所に座った。会話の中身が分からないから、つい視線がチャイナの大きな胸にいってしまう。ふと、チャイナがこちらを見た。慌てて視線を逸らした。ヒロコさ

んの美しい横顔が視界に入ってきた。しばらくぼうっと見つめた。ふと、ヒロコさんがこちらに視線を向けた。ぼくは再び狼狽し、視線を落とした。
チャイナとヒロコさんが哄笑した。なんだろう？　ぼくはそっと上目遣いに二人の顔を見比べた。話は弾んでいるようだった。
ふと、写真を撮影していた舞子さんが、ヒロコさんに言った。
「ヒロコさん」
「はい」
「いま、チャイナさんがおっしゃったこと、ここで実演してもらえないですか？」
「実演」
「ええ」
舞子さんが不意にぼくを見て、にやりと笑った。なんだろう？
「いい実験台がいますし」
実験台？　ヒロコさんが笑いだした。そして、チャイナに何か言った。
「Would you please do that with him?」（注４）
「With him?」（注５）
チャイナがぼくを見た。
「He should be hurt」（注６）

「Oh, do not warry about that. She needs to take pictures」（注７）
「Alright」（注８）
チャイナが立ち上がった。
「え？」
ぼくは舞子さんを見た。
「早川くん。君は、そうね。そのへんで立ってて」
彼女は、部屋の中央を指さした。ぼくは言われるがままに移動した。
チャイナが、にやにやしながらぼくに近寄ってきた。何が始まるんだ？
「いいの。そのままじっとしてて」
舞子さんは命令口調でそう言い、カメラを構えた。ぼくは不安になった。ヒロコさんを見た。
ヒロコさんは手で口を抑え、笑いを堪えているようだった。
チャイナが、胸を揺らしながらぼくに歩み寄った。と、不意に彼女の体が沈んだ。
ドカッ！
いきなり、下腹部に重い衝撃が走った。つづいて、凄まじい激痛が股間に炸裂した。
チャイナの握りしめた拳が、ぼくの股間を突き上げていたのだ。
「うっ！」
ぼくは、股間を両手で抑えて床に膝をつき、横倒しに倒れた。

「すっご～い！」
ヒロコさんと舞子さんが同時に叫んだ。
「You saw that?」（注９）
チャイナが得意気に言った。
「Great!」（注10）
ヒロコさんが拍手した。それから舞子さんに言った。
「ちゃんと写真とれた？」
「ばっちりですよ～ん」
舞子さんはそう言い、それから歯を食いしばって痛みに耐えているぼくの傍らにしゃがみこんだ。
「早川くん、だいじょうぶ？」
大丈夫なわけがない。信じられない激痛だった。睾丸だけではない。腹部が引きつったように痛かった。
「痛い？　ま、そうだよね。チャイナさんはこれが得意技でね。ＷＷＦでもこの手で男のレスラーをマットに這いつくばらせていたんだから」
そうならそうと、早く言ってくれよ……。ぼくは答えようとしたが、息が詰まって言葉にならなかった。視界がぼやけていた。涙が溢れているのだ。やっと眼を拭った。チャイナがヒロコさ

んと、楽しそうに何か喋りあっている。憧れのひとの前で、なんてぶざまなことをさせるんだろう……。

ぼくは全身の力を振り絞って上半身を起こした。

「You did that seriously?」（注11）

「No. If I bust men`s ball seriously, He should be die」（注12）

「軽くやっただけだってさ」

舞子さんがぼくの背中をさすった。

「立てる？」

「な……なんとか……」

ぼくはよろよろと立ち上がった。膝がまだがくがくしている。

「Hiroko! Would you like to try that?」（注13）

「Me?」（注14）

ヒロコさんがまじまじと僕を見た。

「いいですね、それ」

舞子さんが言った。

「タイトル変更ですね。チャイナの護身術教室なんてどうです？」

「あ、それいいね。でも……早川さん、大丈夫？」

大丈夫って……？

「大丈夫だよな」

舞子さんが高圧的な口調で言った。

「彼、昔からヒロコさんの大ファンだったんですって。断るわけないですよ。な、そうだよな」

「え……ええ……はい」

ぼくは、まだ残る痛みのため、思考が麻痺していた。反射的に「はい」と言ってしまったが、いったい何をやるというのだ。まさか……。

ヒロコさんがためらいがちにぼくに近寄った。

「う〜ん、うまくできるかなあ」

ヒロコさんが視線をぼくの股間に向けた。まさか……さっきチャイナがやったことを、ヒロコさんが……。

反射的にぼくは、股間を遮るように、両手を前に組んだ。ヒロコさんがチャイナを見た。チャイナがニヤニヤしながら、なにか英語で言いながら、両手を合わせた。ヒロコさんが頷いた。

いきなり、ヒロコさんはぼくの眼の前で、ぱちんと両手を叩いた。ぼくはぎょっとしてのけぞり、反射的に顔を手で覆った。

「ぎゃっ！」

再び、股間に激痛が走った。ヒロコさんはフェイントをかけてぼくの意識を顔の前に集中させ

ておいて、股間を拳で突き上げたのだ。まともに睾丸に当たった。
ぼくは床に転がり、股間を両手で抑え、呻きながら悶絶した。
チャイナが歓声をあげた。
「命中しましたねえ！」
舞子さんが拍手した。
「信じられない……」
ヒロコさんがため息をついた。
「こんなに効くなんて」
「Ballbusting is a retahlweapon for women against men」（注15）
チャイナが言った。
「There're many ways to bust balls. Would you like to see?」（注16）
「ええ、是非！」
英語のできる舞子さんが勝手に頼んだ。
「OK!」（注17）
チャイナがいきなり、ぼくの襟首をつかんで立たせ、強引にこちらを向かせた。そして、股間を抑えるぼくの両手首をつかみ、引き抜くようにして広げさせ、膝頭をたたき込んだのだ。
それまでのとは比べ物にならない激痛が襲いかかった。全身を電流が走り抜けたようだった。

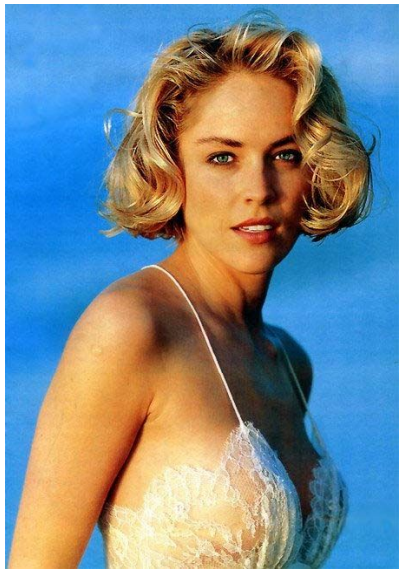
視界がまっくらになった。
身体が鉛のように重くなり、骨が溶けたようだった。ぼくは床に倒れ、うずくまって痙攣するばかりだった。嘔吐がこみあげてきた。
悪夢だった。あんなに心弾ませて待ち焦がれていたヒロコさんとの初仕事で、ぼくは生まれて初めて男にとって最大の急所を殴られ、膝蹴りされたのだ。しかも女子プロレスラーに！
いや、それどころか、十数年、そのひとを思い浮かべて手淫に耽った女性からもだ。ぼくは妄想のなかで何度も彼女に慰められた。妄想のなかで彼女はぼくの体を愛撫し、ペニスを口にくわえ、優しくリードしながら素晴らしい快楽を与えてくれたはずだった。
なのに、現実の彼女は、ぼくに死ぬような苦痛を味わわせようとしている。
チャイナがまたもぼくの襟首をつかんで立たせた。彼女はぼくの背後に回り、はがい締めにした。背中に、大きな乳房と、発達した筋肉を感じた。ぼくは抗おうとしたが、チャイナの凄い力と、激痛のために動くことすらできなかった。
「ごめんなさいね。これも仕事だから」
ヒロコさんが、輝くような笑顔を見せながらぼくに近寄ってくる。ぼくは恐怖で眼を見開く。スカートの裾からすんなりと伸びたヒロコさんの美しい脚が、数センチ後方に退かれる。
「うわあああああ！！！」
蹴られる前にぼくは絶叫していた。

逃げろ！　殺される！
ドスッ！
ヒロコさんの容赦ない膝蹴りが、ぼくの股間に炸裂した。
全身の力が抜けた。
ぼくをはがい締めにしていたチャイナが力を緩めた。
急速に、床に敷かれた白いカーペットの映像が視界に広がった。
だが、倒れる寸前に意思の力が働いた。
ぼくは全身の力を振り絞り、ドアに向かって駆けた。いや、実際はよろよろとよろばいながらドアに寄ってゆき、体ごとぶつけた。
ドアが開いた。
目の前に、サングラスをかけた金髪の女性が立っていた。白いコートを羽織っていた。そこで力尽きた。ぼくは、金髪の女性にもたれかかり、抱きついた。
「What fucking you do this!」（注18）
金髪女性が叫び、つづいて重い衝撃が股間に炸裂した。
またもや股間を蹴り上げられたのだ。
意識が弾け、ぼくは失神した。

目が覚めると、ぼくはベッドにうつ伏せに転がっていた。頭痛、吐き気、腹痛、そして股間を渦巻く激痛……。背骨の関節が全部外れて、身体中に張りめぐらされた神経が軋んだ悲鳴をあげている。
ぼんやりした意識に、女たちの哄笑が飛び込んできた。やっと頭を動かすと、四人の女性――ヒロコさん、舞子さん、チャイナ、そしてもう一人、毛皮の白いコートを身にまとい、その下は黒の胸ぐりの深いドレスを着た金髪の女性がいた。
あれ……。
彼女はたしか、さっき、股間を蹴られた……。
金髪の女性が微笑み、くわえた煙草に火をつけ長い足を組み直した。この仕種、どこかで……。
あっ！
「お～～～～、気がついたかあ！！」
舞子さんが立ち上がり、駆け寄ってきて、ぼくの肩を乱暴につかんで揺すぶった。ぼくは、股間を両手で抑え、お尻を突き出してうつ伏せになっているという、非常に情けない姿勢だったが、舞子さんの乱暴な目覚めの挨拶は、じっとしていても苦痛と不快感が充満したぼくの身体を、ひどく刺激し、ぼくは「やめて～、触らないで～」とみっともない悲鳴を発していた。
「Ahahahahaha-uh-haha!!」（注19）
金髪の女性が両手を叩き、背中をソファに何度も打ちつけながら笑った。

「お前のおかげでよ、すっげえインタビューとれたぜ」
舞子さんは興奮していた。
「そうね。早川さんのおかげね」
ヒロコさんも笑った。チャイナが親指をたて、ニカッと大きな口を横に広げた。
「……」
ぼくは返事をしようとしたが、言葉にならなかった。
「おい、早川」
舞子さんが言った。
「この方、どなたと心得る？」
彼女は、見知らぬ金髪女性を指さした。たしかに見覚えはあるが……。
「聞いて驚くな。シャロン・ストーン様だぞ」
げっ！
ぼくは、反射的に起き上がり、凄まじい激痛が全身を貫いて、絶叫しながらベッドを転げ落ちた。
しゃ……シャロン・ストーン！！
「Sorry」（注20）
まさしくシャロン・ストーンが、すっくと胸を張って立ち上がり、絨毯に顔をつけて転がって

いるぼくに近寄ってきた。
「I must appolpgoze you.....」（注21）
何を言っているのか分からなかったが、さっと右手を差し延べた。ぼくは、反射的に先輩の舞子さんを見た。舞子さんが頷いていた。おずおずと右手を差し延べた。
シャロン・ストーンは、意外な力で、ぼくを引っ張り起こした。ぼくは、つんのめるようにして、立ち上がり、またも股間に痛みが走るのを感じた。
「You, cute Japanese boy」（注22）
シャロンの柔らかな掌がぼくの頬を撫でた。これは……夢？



「sorry, I wanna do that again」（注23）
ドスッ！
またも、あの激痛。
足の裏に感じていたふかふかの絨毯の感触か消え、体が浮いた。
ドスン！
ぼくは、またも床に転がり、七転八倒しながら悶絶した。
シャロンが哄笑し、女たちが全員それに

和した。
もはや、何もできなかった。ほんとうに何もできなかった。自分の体が自分のものでないような気がした。ひたすら時間が早く過ぎてもらうのを願うしかない。下半身全体が、火に包まれたように痛み、わなないていた。
「Oh, I'm feared that I made his balls popped. . . . .」（注24）
シャロンが笑いながら言った。
「You felt so?」（注25）
シャロンが答えながらぼくに近寄り、いきなり、うつぶせになっていたぼくを、乱暴に仰向けにして、ベルトに手をかけた。
抵抗する余裕などない。いきなりベルトを引き抜かれ、ズボンを引き剥がされた。
「あちゃ〜〜！」
「Oh, Jesus!」（注26）
日米の女たちが同時に歓声をあげた。ぼくも、鉛のように重い体をわずかに動かして、自分の股間を見た。
うわ！
陰嚢が、ふだんの三倍ほどにも膨張していたのだ。
内出血したのだろうか。真っ赤に腫れ上がり、対照的にペニスは血の気を失って、ただでさえ

サイズに自信がないのに、三分の二ほどに縮こまっていた。
ま、まさか……。
「不能」の二文字が頭のなかをかけめぐった。思考回路が空爆を浴びたように破壊された。
「うわあああああ！！！」
全身を反らせて叫んだつもりだったが、女たちが笑いながら、ぼくの股間を鑑賞しつづけていたのを見ると、声が出なかったのだろう。
「こんなに膨らむものなのねえ……」
ヒロコさんが、しげしげと興味深そうにぼくの股間を覗き込んでいる。ぼくは、恥ずかしさで頭が混乱した。
「それに真っ赤よ。ひょっとして潰れてしまってるのかしら」
「けっこうメロンくらいに膨らんじゃうっていいますよ」
舞子さんが言いながら、ピンと指でぼくの陰嚢を弾いた。ぼくは絶叫し、体を大きくのけぞらせた。また女性たちが拍手喝采。
「His balls are allright, not popped yet」（注27）
チャイナが言った。
「And his penis is still useful」（注28）
言うなりチャイナは、ぼくのペニスを優しくつかみ、ゆっくりと刺激しはじめた。睾丸の激痛

にも係わらず、不思議な快感がぼくのペニスを包んだ。
「うそ！」
ヒロコさんと舞子さんが同時に叫び、手を口で覆った。ぼくのペニスが勃起しはじめたからだ。シャロン・ストーンがぎらぎらした眼でぼくの股間を見つめながら訊ねた。
「Can he cum?」（注29）
「Of course!」（注30）
チャイナは答え、ペニスから手を離し、ヒロコさんに向かって言った。
「You do that. I heared that he's your admirer」（注31）
ヒロコさんはちょっと当惑していたが、やがてぞくっとするような色っぽい笑みをつくって頷いた。
「ヒロコさんがしごいてくれるってさ」
舞子さんの言葉にぼくはどきんとした。
「ヒロコさんのファンだったんだろ？　もっと喜べよ」
ヒロコさんの右手が、ぼくのペニスを包んだ。かつて、夢にまで見たことだった。彼女の右手が優しく上下した。ぼくは眼を閉じた。呼吸が荒くなった。
と、いきなりシャロン・ストーンがぼくのシャツをはだけ、かがみこんでぼくの乳首を吸った。
「ううっ」

すさまじい快感が全身を包んだ。ペニスがますます激しく膨張した。かつての「右手の恋人」にペニスをしごかれ、ハリウッドを代表するセッスク・シンボルに乳首を吸われている。信じられないことが現実となっていた。睾丸の痛みはますます激しくなっていたが、それもまた、ひとつの愉悦だった。
「気持ちよさそうね」
舞子さんが笑った。チャイナが頷いた。
「He's raped by two celebs.....」（注32）
やがて、痛めつけられた精巣で製造された液体が、容量を越えはじめた。ぼくは激しく喘いだ。いまにも射精しそうだった。
「もうじきドピュッと来そうね」
ヒロコさんがますます激しくしごきながら言った。優雅な美貌に似合わない下品な台詞が、ますますぼくを刺激した。
と、シャロンがぼくの乳首から唇を離して立ち上がり、ぼくの股間に近づいた。チャイナも近寄ってきた。
「It'll be your last sperm.....」（注33）
シャロンが言った。その意味を理解できていれば、ぼくは全身の力を振り絞っても女たちから逃げだすべきだった。だが、ぼくは英語は苦手だったし、何よりも、ヒロコさんによって「抜い

て」くれることのみを願い、それで頭がいっぱいだったのだ。
やがて、激しい快感が全身を貫き、ぼくは勢いよく、睾丸のなかで溜まりに溜まったものを吹き出した。
その瞬間。
「ぐわあああああああ！！！」
ぼくは絶叫した。快感に続いて、信じがたい激痛が股間を襲ったからだ。
チャイナとシャロンが、ぼくの睾丸をひとつずつ握り、全身の力をこめてひねりあげたのだ。
ぼくの怒張したペニスの突端から、赤いものが吹き上げるのが視界に入った。それが最後だった。目の前が真っ暗になり、全身の神経が高圧電流が走ったようにわななき、筋肉が音をたてちぎれたようだった。
意識が弾けとんだ。

〔注釈〕

1 Welcome. Please come in 「どうぞ、入って下さい」
2 And he's Hayakawa-san, our editor 「こちらは早川さん。編集者です」
3 Oh -Hayakawa-san -nice to meet you 「早川さんですね。お目にかかれて嬉しいです」
4 Would you please do that with him? 「彼を相手に実演してもらえませんか？」

5 With him? 「彼と？」
6 He should bu hurt 「大変なことになるわよ」
7 Oh -do not warry about that. She need to take picture 「いいんですよ。彼のことより、写真がほしいんです」
8 Alright 「わかった」
9 You saw that? 「見た？」
10 Great! 「すゴ～い！」
11 You did that seriously ? 「本気で蹴ったのですか？」
12 No · If I bust men`s ball seriously, he should be die 「まさか。私が本気で男の玉を蹴ったら、相手は死ぬわよ」
13 Hiroko! Would you like to try that? 「ヒロコ、あなたもやってみない？」
14 Me? 「私が？」
15 Ballbusting is a retahlweapon for women against men 「玉蹴り、玉潰しは、女にとって男をやっつける最終兵器なのよ」
16 There're many ways to bust balls, Would you like to see? 「玉を苛める方法たくさんあるわ。みたい？」
17 OK! 「了解！」

18 What a fucking you do this!　「てめえ、なにすんだよ！」
19 Ahahahahaha-uh-haha!!「あ～はっはっはっはっはっ、あはははは！！」
20 Sorry「ごめんなさいね」
21 I must appolpgoze you. . .　「あなたに謝りたいの」
22 You, cute Japanese boy　「かわいいじゃない、日本人さん」
23 sorry, I wanna do that again　「ごめんなさい、また、やるわよ」
24 Oh, I'm feared that I made his balls popped. . . . .　「ひょっとして、彼の金玉、潰してしまったのかしら？」
25 You felt so?　「そんな感触した？」
26 Oh, Jesus!「すっご～い！」
27 His balls are allright, not popped yet　「大丈夫だ。まだ潰れてはいない」
28 And his penis is still useful「彼のペニスも、まだ使い物になる」
29 Can he cum?「射精できるのか？」
30 Of course!「もちろん！」
31 You do that. I heared that he's your admirer　「あなたがやって。彼はあなたの崇拝者だそうだから」
32 He's raped by two celebs. . .　「有名人女性二人に強姦されてるのね……」

33 It'll be your last sperm. . . .「これが生涯最後の射精になるわよ」